

『金光明經』における陀羅尼品の研究

——「金勝陀羅尼品」を中心に——

ウルジージャルガル

1. 問題の所在 『金光明經』(Suv)はグプタ朝期にその原形が成立した大乘經典であり、本經が増補され、発展して行く段階で多数の陀羅尼が挿入されている。Suvで陀羅尼(dhāraṇī)を説く独立した品(parivarta)としては「最淨地」(*Viśuddhabhūmi),「金勝」(Hiraṇyāvati),「無染著」(*Asaṅga),「如意宝珠」(*Cintāmaṇi[ratna])という4つの品がある。これらの品には梵文原典が存在しないが、チベット・漢訳などに翻訳が伝承されている。陀羅尼は初期大乘經典では菩薩が備えるべき徳性の一つとして説かれる。後に密教が成立して来ると、陀羅尼は「真言」(mantra)¹⁾を包摂する形で説かれるようになる。Suvにおける陀羅尼品の思想的位置は、大乘仏典で説かれる聞持陀羅尼(dhāraṇadhāraṇī)が密教の真言と同一視されるようになる過程での、中間点とも言える立場に置かれ得る。従ってこれらの品の研究は、陀羅尼の諸相を明らかにする上では無論のこと、Suvにおける陀羅尼品の歴史的位置づけの解明、Suvの成立史研究にも資するものである。

Suvの陀羅尼品を扱った先行研究は、同品に説かれる陀羅尼の数を指摘したものか、或いは内容を概説したものである²⁾。「最淨地」を始めとする品が(1)具体的にどのような陀羅尼を説いているか、(2)何故Suvに挿入されたか、(3)Suvにおいてどのような意味を持つかという問題は未だ十分解明されていない。本論は「金勝」を基に、この三点の解明を試みるものである³⁾。

2. 「金勝陀羅尼品」について 本品は、世尊が善住(*Supratisthita)菩薩に「金勝陀羅尼」とはどのようなものを説く導入(D202a4-b1)、陀羅尼を習得する手順(D202b1-203b3)、陀羅尼を習得する実践方法(D203b3-204a1)という三つの部分から成る。本品は、先行品である「如来寿量」(Tathāgatāyuhpramāṇa)や「三身分別」(*Kāyatrayavibhāga)で説かれる仏身論を基礎に置き、「空性」(sūnyatā)を説く品の前提となる陀羅尼を説いている。「聴聞能力としての陀羅尼も、空のような普遍的真理を理解し、記憶する」と氏家[1984: 19]が指摘しているように、「空性」を理解するには、陀羅尼を習得する必要があったのではないかと考えられる。

「金勝」の導入部では、世尊が善住菩薩に「誰であれ、三世の一切諸仏に対して供養を行い、恭敬しようとする者は『金勝陀羅尼』を学習し心に保つべきである」（D202a5-6）と説く。その理由について世尊は、「『金勝陀羅尼』は三世の仏世尊たちの母であるからである」（D202a6）と説明する。「三世の仏世尊たちの母」である「金勝陀羅尼」とは、般若波羅蜜（*prajñāpāramitā*）のことを指していると考えられる。このことは、般若波羅蜜は「過去・現在・未来を通じて一貫して説かれる普遍の教え」⁴⁾であり、それは「ブッダを生むものとして仏母と称する」⁵⁾ものであるとも解釈され得ることから理解できる。従って「金勝陀羅尼」とは、「学習したものを心に保つ」ことを可能にする陀羅尼、すなわち「聞持陀羅尼」のことであり、「仏母」である般若波羅蜜に他ならないことがわかる。

「金勝」では、陀羅尼を習得するための最初の儀礼は、仏世尊と菩薩の名号を唱えることだという（D202b3-203a4）。それは、陀羅尼を習得する前提が念仏（*buddhānusmṛti*）であることを示している⁶⁾。念仏とは仏身を記憶して心に保つことであるから、本品は仏身論を基礎として説かれていると推測できる。唱えられるべき「五仏」（D202b3-4）のうち東の阿閼（*Akṣobhya*）、南の宝幢（*Ratnaketu*）、西の阿彌陀（*Amitābha*）、北の天鼓音王（*Dundubhisvara*）は、Suvの「序品」（*Nidāna*）や「如来寿量」に登場する。「金勝」では、シャカムニが主尊として登場しているが、後の密教では毘盧遮那（*Vairocana*）が主尊として登場することになる。阿閼を始めとする四方四仏が密教の両界マンダラに現れる四方四仏に引き継がれた、あるいは影響を与えた可能性があることが、以上のSuvに登場する諸尊の名称から推察され得る⁷⁾。

「金勝」では、次に「十方諸仏」の名号を唱えるべきことが説かれる（D202b4-203a1）。「十方無量仏」（T. No. 665, 16: 413b10）や「十方世界一切如来」（T. No. 665, 16: 414c28）は、Suv「懺悔」（*Deśanā*）や「滅業障」（**Nirodhakarmāvaraṇa*）に数箇所用例が見られるが、諸尊の具体的な名称は挙がっていない。「十方諸仏」という用例は、『六度集經』（T. No. 152, 3: 3a25）や『摩訶般若波羅蜜經』（T. No. 223, 8: 219c1）などの經典中にあるので、「金勝」も先行する經典に説かれる思想を受け継いでいることがわかる。しかし諸尊の名称を具体的に説くという特徴が本品にはある⁸⁾。本品は、「如来寿量」に説かれる仏身論に基づいた「觀念の念仏」の思想から「口称の念仏」の思想が現れる過程を示している。「金勝」では、その次に現れるのが観自在を始めとする十の菩薩の名称である（D203a1-4）。これら十の名称は、前々品「最浄地」で説かれる菩薩十地の思想を深く意識して説かれたこと

(158) 『金光明經』における陀羅尼品の研究 (ウルジージャルガル)

が考えられ、菩薩十地の思想が根底にあることがわかる。密教では観自在を始めとするこれらの菩薩は、マンドラに描かれ、配置されることになる。またこの「金勝」が、密教のマンドラに影響を与えた可能性が高いことが指摘され得る。その根拠として、密教における「標準型八大菩薩」の中から除蓋障 (*Sarvanīvaraṇa-*viṣkambhin*) を除いたすべての菩薩が本品に登場していることが挙げられる⁹⁾。

「金勝」はまた「真言陀羅尼」(*mantradhāraṇī*) を読誦すべきことを説くが (D203b3–204a1), それをもたらす効力について説明を与えない。一方、「最浄地」は、十地各地のそれぞれで読誦されるべき「真言陀羅尼」が各地にある菩薩を護る守護呪としての効力を発揮することを説く。従って「金勝」で説かれる「真言陀羅尼」は「聞持陀羅尼」を習得する過程の一つの手順となっていることがわかる。当該箇所は「真言陀羅尼」を読誦する直前に念仏すべきことを説くので、成仏を目的にしていると考えられる。それが後の密教における即身成仏をもたらす「口密」(*vāc*) の真言へと発展したと思われる¹⁰⁾。本箇所は「聞持陀羅尼」から「口密」の真言へと思想的に発展する過程の一側面を示していると推測されよう。多くの大乘經典は陀羅尼がもたらす功德を説く。「金勝」もその例外ではない。ここで説かれる陀羅尼の功德とは (1) 福德が増大すること (D203a5–7), (2) 所願を成就させること (D203a7–b1), (3) 無上正等菩提を獲得しない段階で、菩薩たちによって守護されること (D203b1–3) の三つである。

「金勝」の末尾は、「聞持陀羅尼」を習得するため実践がマンドラの中で行われることを説く (D203b3–204a1)。そこではまず初めに先述の「真言陀羅尼」を読誦すべきことが強調される¹¹⁾。氏家 [1984: 141] は「憶持の陀羅尼は純密の成立期にはマンドラのなかに吸収されてしまったのではないか」と推定する。しかし、「金勝」における陀羅尼を習得する儀礼の手順の記述を踏まえれば、マンドラは「聞持陀羅尼」を習得するための手段と見なされていると言えよう。本品に現れるマンドラに関しては、その中で諸尊の名号を唱える必要性が説かれるが、具体的にどのように諸尊を配置し、描くべきかについては説かれない。これらが説かれるようになるのは、後の両界マンドラが現れる段階である。

3. まとめ 本考察から導かれる結論は次の通りである。(1) 「金勝」で説かれる「金勝陀羅尼」とは、学習したものを心に保つ能力である「聞持陀羅尼」である。この陀羅尼は、三世諸仏の母である陀羅尼、すなわち般若波羅蜜と同一視されている。(2) *Suv* で説かれる仏身論や菩薩思想に基づき、空性説を理解させるために、般若波羅蜜に他ならない陀羅尼の習得が必要とされた。この理由から「金

勝」が「空性品」の前に挿入されたと推測される。(3)「金勝」は、仏身論に基づく「観念の念仏」から「口称の念仏」に、「聞持陀羅尼」から「口密」の真言に至る思想的発展過程を示している。また「金勝陀羅尼」を習得する手段とされるマンダラは、後の密教で描かれるマンダラの初源形態と見做されるものである。

- 1) 以下「真言」という語を用いるが、これは密教で説かれるものを意図するものであることをお断りしておく。 2) Nobel [1958], 平松 [1983]. 3) 本論で用いるテキストは Jinamitra, Śilendrabodhi, and Ye shes sde, trans., *'Phags pa gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po las gser can zhes bya ba'i gzungs te le'u*, D. pa 202a4–204a1 に基づく。 4) 氏家 [1984: 61]. 5) 渡辺 [2013: 135]. 6) 氏家 [1987: 27]. 7) 田中 [2013: 115] は「胎蔵と金剛界の四仏は、『金光明經』の四方四仏から、それぞれ別の過程を経て成立した」と推定している。この推定は「金勝」の五仏を踏まえた結論ではないが、本章はそれをさらに明白に物語るものであろう。 8) Suv と対照的に『仏説観仏三昧海經』(T. No. 643, 15: 678a8–19) と『十住毘婆沙論』(T. No. 1521, 26: 41b7–11) は、四方四仏を含む十方仏をあげる。それらと Suv が、共通の名号を持つのが「上方広衆徳」と「下方明徳」である。 9) 頼富 [1990: 609–612]. 10) 氏家 [1987: 170] は「口密の真言の発生と同時に諸仏が発生し、ただちに曼荼羅の世界に溶け込み、…〔中略〕…ひとたび真言が発生すれば、ただちに自身が如来に加持されて曼荼羅中に即身成仏できる」のが密教の解脱観の特色と基本であると述べている。「金勝」では諸仏の名号を唱え、その後真言陀羅尼を読誦する。それがマンダラの中で実践される。しかし本品が真言を読誦すれば、即身成仏できると説いているか否かは判断し難い。 11) 氏家 [1984: 140–141] は「真言陀羅尼を成就する法式（持呪法）が説かれる。…〔中略〕…マンダラ的な要素をもつ憶持の陀羅尼が真言化していく過程が感じとられる。…〔中略〕…金勝陀羅尼は、大乘の憶持の陀羅尼がマンダラ化すると同時にその本来の性格を失いつつある陀羅尼ではないか」と解説する。しかし筆者は当該箇所説かれるのが「金勝陀羅尼」を習得する実践方法について説かれる中で、真言陀羅尼を説くが、それを成就する法式については説いていないと判断する。

〈略号・参考文献〉 D: *sDe dge bKa' 'gyur*. T.: 大正新脩大藏經. Nobel, Johannes [1958]: *Suvarṇaprabhāsottamasūtra*. Leiden: J. Brill. 氏家覚勝 [1984]: 『陀羅尼の世界』東方出版。同 [1987]: 『陀羅尼思想の研究』東方出版。田中公明 [2013]: 「曼荼羅とは何か」(『大乘仏教のアジア』シリーズ大乘仏教 10. 春秋社, pp. 103–127). 平松澄空 [1983]: 「金光明經における陀羅尼」(『印度学仏教学研究』第 31 巻第 2 号, pp. 136–137). 頼富本宏 [1990]: 『密教仏の研究』法蔵館。渡辺章悟 [2013]: 「般若經の形成と展開」(『智慧／世界／ことば——大乘仏典 I』シリーズ大乘仏教 4. 春秋社, pp. 101–153).

〈キーワード〉 陀羅尼品, 聞持陀羅尼, 真言陀羅尼, 仏身論, 菩薩思想, 空性

(東洋大学大学院)